

文法練習問題に焦点を当てた高等学校 「英語表現 I」教科書分析

甲 斐 順

1. はじめに

平成21年に告示された高等学校学習指導要領の外国語科に属する英語に関する科目に「英語表現 I」が新設された。この科目は、「基本的な言語規則に基づいて、様々な場面に応じて適切に話すことや書くことができるようにし、あわせて論理的思考力や批判的思考力を養うことをねらいとして内容を構成する」（文部科学省，2010）とされているが、平成25年度から使用されている教科書の多くは文法シラバスに基づいている（中井，2016；下山田，2018；鶴澤，2016）。教科書の目次に文法事項が記載されていない教科書の採択率が低く、学校現場では文法シラバスをもとに構成された教科書が広く利用されていることがその要因とされる（鶴澤，2016）。科目の目標及び内容では、「文法」という言葉は使われていないにもかかわらず（中井，2016），教科書が文法シラバス中心の構成で、「コミュニケーション英語 I」で扱うべき文法事項の解説と文法練習問題に多くを割いているのが実態である（鶴澤，2016）。中井（2016）は、文法学習は必要不可欠のものであると認めた上で、文法学習の学び方について課題があると指摘する。文法問題をこなすのではなく、文法表現や英単語の使い方や学ぶことに意味があり、form と meaning だけでなく、その use を内在化させない限り、実際のコミュニケーションで英語を使えるようにならないと中井（2016）は言う。文法構造を使えることは、形式を正確に使うことだけでなく、semantics の点で有意義に、また pragmatics の点で適切に使うことを意味しており（Larsen-Freeman, 2003），文法練習問題で正解を得る以上に、実際のコミュニケーションで有意義かつ適切に使えることが重要であるだろう。

本研究では、平成29年度から使用されている「英語表現 I」の教科書の文法練習問題について、その現状を分布で示し、課題を明らかにするとともに、今後の教科書編集に係る文法練習問題作成に資することを目的とする。

2. 先行研究

本節では、「英語表現 I」の教科書を対象とした研究を概観し、コミュニケーションと文法の関係から教科書の文法練習問題を分析する枠組みを提示し、研究課題を設定する。

近年、「英語表現 I」の教科書を分析した研究が報告されている（水島，2016；孫工・江利川，2019；鶴澤，2016；中井，2016）。水島（2016）は、「英語表現 I」の8冊の教科書について、語用論的解説がどの程度、どのような内容をもって学習

者に提供されているかを質的・量的に調べた。その結果、文法的側面に関する解説が加えられた例文が全体に占める割合は45.8%で、明示的な語用論的解説の量は例文全体の1.2%で圧倒的に少なかった。また、語用論的解説が加えられていた40の例文は、すべて助動詞の単元に属し、内容に正確さを欠くことも判明した。

孫工・江利川（2019）は、「英語表現Ⅰ」の練習問題における設問の題材分析を計量的に行った。教科書採択率が約7割を占める上位11冊の教科書を分析し、その結果、教科書の設問の81%は、文法・語法や事実確認、読解方略を問う「言語形式設問」であった。また、設問全体に占める「批判的思考設問」の割合は15%に過ぎず、文部科学省（2010）の「批判的思考力を養うことをねらいとして内容を構成する」という言葉と現実の乖離を示していた。「批判的思考設問」のうち社会問題を題材とした設問は5%に過ぎず、その5%についても環境問題と他者性だけで88%を占め、階級、人権、ジェンダー、セクシャリティ、平和問題を題材とする設問は皆無であった。

鵜澤（2016）は、「英語表現Ⅰ」の教科書の現状と科目指導のあり方について考察を行った。鵜澤は、平成28年度に使用が予定されている採択率上位5冊の教科書を主として分析した。その結果、教科書は文法事項の提示・解説とドリル型の文法練習問題を中心に構成され、文法シラバスの配列になっていた。5冊以外のほとんどの教科書も文法事項が学習指導の中心となっていた。文法の理解に力点を置いたインプット型活動の占める割合が多く、言語形式に関する蓄積を優先させ、従来と変わらない文法指導が繰り返される可能性があることを鵜澤は指摘する。そして「話す」、「書く」を中心とした発信型の言語活動の充実を図る必要性を訴えた。

中井（2016）は、「英語表現Ⅰ」の教科書の印象と期待する内容について関西一円の高等学校英語教員48名にアンケートを行った。その結果、「英語表現Ⅰ」の教科書は「文法シラバスである」と認識している教員は83.3%にもおぼろげに、「自己表現活動を取り入れている」という印象は40%にも満たなかった。一方、教員が「英語表現Ⅰ」の教科書に期待する内容として、「自己表現活動」が60.4%、「英語表現の特徴、おもしろさを学ばせる」が54.2%、「日英表現の違いを学ばせる」が47.9%となっており、教員の教科書への期待と実際に使われる教科書の間大きな隔たりが見られた。高等学校の教科書は各学校、つまり教員が選ぶことができるわけで、理想と現実のはざまがアンケート結果から垣間見える。中井は、「英語表現Ⅰ」の教科書は「並べ替え」、「和文英訳に準じる問題」などの正解を求める文法理解トレーニング型の問題で、仕組みまれた表現活動で構成されていると指摘する。学習者が正解を得られないアウトプット型のトレーニングを避け、英語力に伸び悩む可能性にも言及している。中井は、正確な理解を促すドリル的な練習の必要性を認めつつ、英語表現の喜びがある教材を用いて、知的な好奇心を引き出すとともに表現意欲を培う活動を行うことが望ましいと述べる。

「英語表現Ⅰ」の科目の目標は、「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う」（文部科学省、2010）

となっている。また、「英語に関する各科目に共通する内容等」の言語材料で配慮する事項では、「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」と「コミュニケーションを行うために必要となる語句や文構造、文法事項などの取扱いについては、用語や用法の区別などの指導が中心とならないよう配慮し、実際に活用できるように指導すること」が挙げられている（文部科学省，2010）。しかし、先行研究から、「英語表現Ⅰ」の教科書は、文法シラバスを中心として編纂され、文法練習問題にページが割かれ、この科目の目標や言語材料で配慮する事項とかけ離れているのが実態である。

コミュニケーション能力を養うことを重視した現行の学習指導要領は、Communicative Language Teaching の影響を受けている。この指導では、文法的に正しい文を産出する正確さ（accuracy）よりも、自分の意図を相手に伝える流暢さ（fluency）を重んじる姿勢が強調されてきた（米山，2011）。1990年代以降、accuracy と fluency を対立する概念ではなく、学習者の学習目的や学習段階に応じて、バランスよく伸ばしていくことが求められている（白畑，富田，村野，& 若林，2009）。この流れを受けて、Baleghizadeh (2012) は、英語教育の教材について次のように述べている。

ELT materials should expose learners to activities that both encourage them to use grammatical forms for the sake of communication in real-life situations (fluency-centered practice) and activities that prompt them to use grammatical forms for error-free language production (accuracy-centered practice).

(Baleghizadeh, 2012, p. 63)

中井 (2016) が、正確な理解を促すドリル的な練習の必要性を認めつつ、英語表現の喜びがある教材を用いて、知的な好奇心を引き出すとともに表現意欲を培う活動を行うことが望ましいと指摘していることは先に触れた。Nunan (1999) もドリルや練習といった活動を行うのは悪くはなく、学習過程において必要な要素であり、コミュニケーションを行うことを可能にする技能であると述べる。Nunan は、ドリルや練習といった活動を reproductive と位置付け、creative な活動を学習者に提供する機会が必要であると言う。creative な活動とは、新しく、未知の方法で、熟知した言語要素を再結合することで、creative な活動の前に reproductive な活動があると述べる。

コミュニケーションの視点から accuracy と fluency がバランス良く教科書に取り入れられているか、また活動の視点から reproductive や creative な活動がバランスよく配置されているかをそれぞれ分析してみるのも教科書分析の一つの手法としてありえるだろう。教科書ではないが、Baleghizadeh, Goldouz, and Yousefpoori-Naeim (2016) は、Baleghizadeh (2012) が提唱した文法教材開発のための枠組みを用いて、初級者から上級者までを対象として世界的に人気のある 3 種類の ELT (English Language Teaching) ワークブックの文法練習問題を分析した。Baleghizadeh (2012) の枠組みについては、この後詳述するが、ELT ワークブックの分析の結果、

Accuracy-Centered Reproductive Activities の観点に属する練習問題が圧倒的に多かった。次に Fluency-Centered Reproductive Activities の観点に属する練習問題がやや多く、Fluency-Centered Creative Activities に属する練習問題は数が少ないながらも見られた。Accuracy-Centered Creative Activities に属する練習問題はほとんど見られなかった。この結果を受けて、Baleghizadeh *et al.* (2016) は、Fluency-Centered Creative Activities をもっと重視して配置することを示唆として挙げている。それにより学習者が意味のある文脈で特定の構造から利益を得るとともに、幅広い知識を獲得する機会を得ることになると述べている。

ここで、Baleghizadeh (2012) が提唱する文法教材開発のための枠組みについて述べる。彼によると accuracy と fluency を一つの座標軸に、reproductive と creativity をもう一つの座標軸として交差させ、図 1 のように四つの観点に分ける。

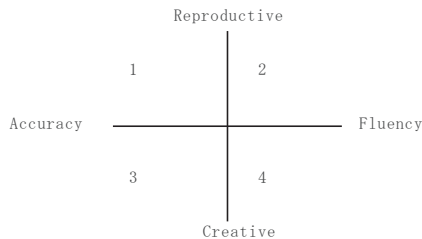


図 1 文法教材開発のための枠組み (Baleghizadeh, 2012, p. 63に基づく)

一つ目の観点は accuracy と reproductive を組み合わせた Accuracy-Centered Reproductive Activities (AR) で、コミュニケーションのない状況の下、学習者に目標となる構造を操作させて正確に使えることを求める。例えば、置き換え練習、穴埋め、文の書き換え、多肢選択、文章完成、組み合わせ、誤りの訂正を行うといった形式が該当する (Baleghizadeh, 2012; Baleghizadeh *et al.*, 2016)。次は、誤りの訂正の例である。

Are the underlined verbs right or wrong? Correct the verbs that are wrong.

1. Water boils at 100 degree celsius [*sic.*]. ...RIGHT...
2. The water boils. Can you turn it off? ...WRONG: is boiling...
3. Look! That man tries to open the door of your car.

(Murphy, 1994, p. 7)

二つ目の観点は、Fluency-Centered Reproductive Activities (FR) で、コミュニケーション活動である。特定の構造を学習者に操作させるという意味で AR と類似しているが、意味のあるコミュニケーション活動の要素を組み入れているという点で異なる。例えば、ロールプレイ、クイズ、インタビューといった活動が挙げられる。また次の活動では、“What would you do if ...?” と “If I ..., I would ...” と

いう言語形式を操作する活動であるが、真のコミュニケーションの要素、つまり、最初の生徒は、対話者の返答がわからないといった情報のギャップがあり、FRに分類されている。

Discuss what you would do in the following situations:

1. What would you do if you were kidnapped?
2. What would you do if you were a millionaire?
3. What would you do if you were handicapped?

(Baleghizadeh *et al.*, 2016, p. 157)

三つ目の観点の Accuracy-Centered Creative Activities (AC) では、創造的な活動を通じて、学習者は正確な文を産出することが必要である。学習者には従うべきモデルは与えられず、正しく文を書くという点で、正確さと創造性が求められる。Baleghizadeh (2012) は、文法化タスク及び文法ディクテーション (ディクトグロス) といった活動を AC としている¹⁾。文法化タスクとは、ニュース記事に題名をつけたり、ニュースの題名からニュースの内容を想像させる活動を指す。次は、文法化タスクの活動例である。

Here are some newspaper headlines. Expand them so as to summarize the story.

For example: BANKS WARN HOMEOWNERS: INTEREST RATES TO RISE

Banks have warned homeowners that interest rates will rise.

Or Banks are warning homeowners that interest rates are going to rise.

(Thornbury, 2001, p. 82)

ディクトグロスは、教師が普通の速度で2度読み上げたテキストを学習者はメモをとり、グループでテキストを再構築する活動である (Wajnryb, 1990)。

四つ目の観点 Fluency-Centered Creative Activities (FC) は、焦点化タスクで、ある特定の文構造を使いながら学習者に言語を産出するように要求する。明示的に特定の文法構造を使うように指示されないので、タスクを遂行する上で、学習者自らがどの言語形式が使われているかを決定することになる。流暢性を中心としており、学習者がコミュニケーションに言語を使うことが奨励される。次は、FCの活動例である。

Look at the list below. Work with a partner and decide which ones are the five most exciting sports. Be ready to explain why.

swimming	soccer	tennis
basketball	wrestling	volleyball
fencing	hockey	diving

(Baleghizadeh, 2012, p. 64)

学習者に明示的に特定の文法構造を使うよう指示されていないが、タスクを行う際、学習者自身が比較級や最上級を使って表現する判断を行う必要がある。

Baleghizadeh *et al.* (2016) は、上記の Baleghizadeh (2012) の枠組みを基に、ELT ワークブックを分析したが、サンプル数の少なさを研究の限界点として挙げ、他のワークブックや教科書でも調査分析する必要性を指摘している。

「英語表現 I」の文法練習問題の内容は、鶴澤 (2016) や中井 (2016) で一部紹介されているが、すべての教科書を分析しているわけではない。孫工 & 江利川 (2019) は採択率約 7 割を占める 11 冊の教科書分析を行っているが、残り 3 割に当たる教科書の分析までは行っていない。筆者の知る限り、accuracy/fluency 及び reproductive/creative の観点から「英語表現 I」のすべての教科書の文法練習問題を分析した研究は行われていない。また現在までのところ、Baleghizadeh (2012) の枠組みのように四つの観点をういた文法練習問題の分析方法は提示されていない。そこで、本研究では、Baleghizadeh (2012) が提唱している文法教材開発のための枠組みに基づき、平成 28 年度検定を経て、平成 29 年度から使用されている高等学校「英語表現 I」のすべての教科書で扱われている文法練習問題について、一つの試みとして調査分析を行う。そして、現状を分布で示すことにより、課題を明らかにするとともに、今後の教科書編集に係る文法練習問題作成に資することを目的とする。そこで、次を本研究の研究課題として提起する。

- ・「英語表現 I」のすべての教科書に記載されている文法練習問題は、Baleghizadeh (2012) が提唱している文法教材開発のための枠組みを用いた場合、四つの観点的分布はどのようになっているか。

3. 方法

本節では、本研究で行った調査について、調査対象の教科書及び手順を論述する。

3.1 調査対象の教科書

分析対象とする教科書は、平成 28 年度に検定された高等学校「英語表現 I」の 13 の発行者による合計 20 冊である。具体的には、*Atlantis*, *Attainable*, *be Advanced*, *be Standard*, *Big Dipper*, *Crown*, *Departure*, *Dualscope*, *Echo*, *Mainstream*, *My Way*, *New Favorite*, *New One World*, *Perspective*, *Polestar*, *Select*, *Vision Quest Advanced*, *Vision Quest Core*, *Vision Quest Standard*, *Vivid* である²⁾。

3.2 手順

分析対象とする「英語表現Ⅰ」の教科書20冊の文法事項の説明が記載されている箇所以降に載っているすべての練習問題、各課のページの欄外に指示文が記載されている Try などの問題、複数の課を学習した後でまとめられている復習問題、巻末に掲載されているアクティビティについて、Baleghizadeh (2012) が提唱している文法教材開発のための枠組みと照合しながら、四つの観点別に分類した。教科書によっては本レッスンに入る前の導入教材と見られる Warm-up やプレゼンテーション、パラグラフ・ライティングなどの練習問題があり、それらも Baleghizadeh (2012) の枠組みに基づいて、四つの観点に分類した。一つの問題の中に複数の観点が含まれている場合は、それぞれの観点に分類した。一見すると自由英作文のように見える練習問題については、書き方の例やヒントが記されており、コミュニケーションのない状況の下、学習者に目標となる構造を操作させて正確に使えることを求める AR に分類した。ディクテーションやノート・テイキングに基づいて英語で書かせるような活動については、コミュニケーションのない状況の下における個人で行う正確性を求める活動として、AR に分類した。なお、各課の最初に掲げられている対話文等の内容理解のための練習問題やロールプレイについては、分析の対象から除いた。表1は、観点毎に分類する際に基準とした活動名称及び教科書記載例である。

表1 観点毎の分類方法の活動名称及び教科書記載例

観点	活動名称	教科書記載例
AR	置き換え練習	下線部に語(句)を入れて、自分のことを言ってみよう。 My name is <u>Ayaka</u> . I am a high school student. I like <u>K-pop</u> very much. I <u>play tennis</u> on Sundays. Thank you., <i>Select</i> , p. 15
	穴埋め	() に適切な関係代名詞を入れて、文を完成しなさい。 1. The Beatles are musicians () had a great influence on the world culture., <i>Echo</i> , p. 58
	文の書き換え	Rewrite the sentences in the passive voice. (1) A loud noise woke me up during the night. → _____, <i>Dualscope</i> , p. 41
	多肢選択	() 内から最も適切な語(句)を選びなさい。 1. I (read, was reading, have been reading) this book since I came home., <i>Perspective</i> , p. 29
	文章完成	[] 内から接続詞を選び、絵の内容に合うように、英文を完成させなさい。 1. We'll go hiking _____ (絵及び選択肢省略), <i>Vision Quest Standard</i> , p. 103
	マッチング・タスク	左右の語句をつないで、英文を完成させなさい。 1. They went to the library · 2. I was very happy · (以下省略) · (a) to leave her umbrella on the train. · (b) to do their homework together. (以下省略), <i>Vision Quest Core</i> , p. 51
	誤りの訂正	Correct the error in the underlined part. (1) Kenji <u>has visited</u> the amusement park three times if he goes there again., <i>Dualscope</i> , p. 23
	和文英訳(日英空所補充)	日本語に合うように、次の英文を完成させなさい。 4. この皿を割ったのはだれ? — ケンだよ., <i>Attainable</i> , p. 7
	語形変化	Change the verb in parentheses into the suitable form. ① Rei and Shunsuke (be) on the same baseball team for nearly ten years., <i>Mainstream</i> , p. 31

観点	活動名称	教科書記載例
AR	並べ替え	Put the words in brackets in the correct order. I.[good / at / chess / Kevin / is / playing]. <i>Polestar</i> , p. 9
	ディクテーション	Listen to the recording and fill each blank with a suitable word. Mr. Adam Brown (①) an English teacher. He (②) from Canada. (以下省略) . <i>Polestar</i> , p. 9
FR	ロールプレイ	下線部を言い換えて、ペアで会話しましょう。 A: Have you ever been abroad? / B: Yes, I have been to <u>Hawaii</u> with <u>my family</u> twice. / No, I have never been abroad. I want to go to <u>Greece</u> some day.. <i>Crown</i> , p. 19
	インタビュー	Work in pairs. Ask your partner questions and take notes. Ex.) What is your name? - My name is Yoshida Mai. <i>Big Dipper</i> , p. 24
AC	文化化タスク	該当なし
	ディクトグロス	該当なし
FC	問題解決タスク	Choose a Japanese toy, game, event or historical figure. Write three sentences about it/him/her.. <i>Vision Quest Advanced</i> , p. 86

4. 結果

「英語表現 I」20冊の教科書で扱われている文法練習問題について、Baleghizadeh (2012) が提唱している文法教材開発のための枠組みに基づき、各教科書における観点毎の頻度と割合を表したのが表2である。図2は、各教科書における観点毎の割合を表したものである。ただし、ACは除いている。

表2 各教科書における観点毎の頻度及び割合

教科書名	AR	FR	AC	FC	合計
<i>Atlantis</i>	210	36	0	0	246
	85.4%	14.6%	0%	0%	100%
<i>Attainable</i>	210	35	0	0	245
	85.7%	14.3%	0%	0%	100%
<i>be Advanced</i>	275	61	0	22	358
	76.8%	17.0%	0%	6.1%	100%
<i>be Standard</i>	273	61	0	24	358
	76.3%	17.0%	0%	6.7%	100%
<i>Big Dipper</i>	313	41	0	2	356
	87.9%	11.5%	0%	0.6%	100%
<i>Crown</i>	229	2	0	0	231
	99.1%	0.9%	0%	0%	100%
<i>Departure</i>	146	41	0	0	187
	78.1%	21.9%	0%	0%	100%
<i>Dualscope</i>	157	18	0	3	178
	88.2%	10.1%	0%	1.7%	100%
<i>Echo</i>	101	16	0	1	118
	85.6%	13.6%	0%	0.8%	100%
<i>Mainstream</i>	158	44	0	1	203
	77.8%	21.7%	0%	0.5%	100%
<i>My Way</i>	205	12	0	0	217
	94.5%	5.5%	0%	0%	100%

教科書名	AR	FR	AC	FC	合計
<i>New Favorite</i>	164	6	0	3	173
	94.8%	3.5%	0%	1.7%	100%
<i>New One World</i>	114	34	0	0	148
	77.0%	23.0%	0%	0%	100%
<i>Perspective</i>	226	24	0	0	250
	90.4%	9.6%	0%	0%	100%
<i>Polestar</i>	269	5	0	0	274
	98.2%	1.8%	0%	0%	100%
<i>Select</i>	143	20	0	0	163
	87.7%	12.3%	0%	0%	100%
<i>Vision Quest Advanced</i>	178	49	0	9	236
	75.4%	20.8%	0%	3.8%	100%
<i>Vision Quest Core</i>	146	56	0	1	203
	71.9%	27.6%	0%	0.5%	100%
<i>Vision Quest Standard</i>	171	49	0	5	225
	76.0%	21.8%	0%	2.2%	100%
<i>Vivid</i>	191	15	0	1	207
	92.3%	7.2%	0%	0.5%	100%
合計	3879	625	0	72	4576
	84.8%	13.7%	0%	1.6%	100%

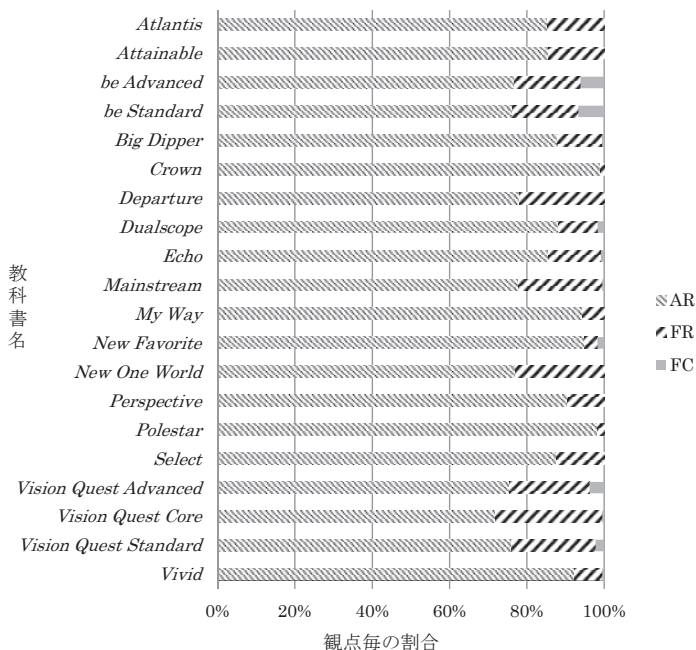


図2 各教科書における観点毎の割合

「英語表現 I」20冊の教科書における文法練習問題の観点毎の分布は、平均すると AR が84.8%, FR が13.7%, AC が0%, FC が1.6% となっており、すべての教科書において AR が最も多く占めている。AR の割合が最も多い教科書は *Crown* (99.1%) で、最も少ない教科書は *Vision Quest Core* (71.9%) で、平均すると 84.8% となっている。AR では、日英空所補充、多肢選択、並べ替え、空所補充、和文英訳、語形変化の問題はどの教科書でも扱われている。ここで具体的に AR に分類されている問題をいくつか取り上げたい。次は、日英空所補充の問題である。

日本語の意味に合うように、() 内に適切な語を入れて言いましょう。

1. ベンはサーフィンが好きで、週末はいつもビーチに行きます。

Ben () surfing and always () to the beach on weekends.

(*New Favorite*, p. 19)

この問題では日本語を忠実に英語で表現することが求められ、likes と goes が言えることが求められている。次は並べ替えの問題である。

() 内の語句を並べかえて、英文を完成させなさい。

1. (a / big / is / shopping mall / there) near the station.

(*Attainable*, p. 11)

この問題でも There is ~ と正しく書けることが求められる。前述したように AR では、コミュニケーションのない状況の下、学習者に目標となる構造を操作させて正確に使えることを求めており、中井 (2016) が指摘するように、正解を求める文法理解トレーニング型の問題で、仕組まれた表現活動で構成されていることがわかる。

AR に次いで多かったのは、FR であった。FR の割合が最も多い教科書は、*Vision Quest Core* (27.6%) で、最も少ないのは *Crown* (0.9%) で、平均すると 13.7% で AR との差は歴然としている。次は、インタビューの例である。

ペアになり、次のやりとりを行いなさい。

A: What are you interested in?

B:

A: What [Who] is your favorite?

B:

A: Can you tell me more about it [him, her]?

B:

(*Vision Quest Core*, p. 18)

これは5文型を学習した後で、やり取りを行う練習問題となっているが、コミュニケーション活動になっている。

AR, FRに次いでFCの割合が3番目に多かった。すべての教科書に占めるFCの平均比率は1.6%で、ほとんど採用されていない状態と言える。FCの割合が最も多い教科書は、*be Standard* (6.7%)であった。*be Standard* や *be Advanced* では、次のように、どんな文法項目を使うか明示的に示されていない練習問題が多い。

Group Work ▶ 家や学校の近くの交通機関や交通施設について、問題点や改善点をまとめた文章をつくり、発表してみよう。

(*be Standard*, p. 50)

学習者にとってどんな文法項目を使うか明示されていない分ハードルが高くなるが、課題を解決するための思考力・判断力・表現力が身につく活動になると思われる。

ACを取り入れている教科書は1冊もなかった。つまり、文化化タスクやディクトグロスは、「英語表現 I」の教科書で扱われていないことがわかる。

5. 考察

本研究では、研究課題を一つ設定した。それは、「『英語表現 I』のすべての教科書に記載されている文法練習問題は、Baleghizadeh (2012) が提唱している文法教材開発のための枠組みを用いた場合、四つの観点の分布はどのようになっているか。」であった。分析対象とした「英語表現 I」の20冊の教科書における文法活動の頻度から、すべての教科書においてARが占める割合が最も多いことが判明し、平均では84.8%となっていた。すべての教科書は、「正確性を中心とした再生的な」文法活動を多数採用していることになる。つまりコミュニケーションのない状況の下で、学習者に目標となる文法構造を操作させて正確に使えるようにすることを求める活動が教科書の文法問題のほとんどを占めていることになる。なお、ARの内容としては、中井(2016)が述べるように、「並べ替え」、「和文英訳に準じる問題」などの正解を求める文法理解トレーニング型の問題となっていた。

ARに次いで多かったのは、FRであった。ただし、FRの教科書に占める平均の割合は13.7%でARとの差は歴然としていた。FRの活動は、ロールプレイが多いが、ペアで質問するインタビュー形式も見られた。「流暢性を中心とした再生的な活動」は、ペアで比較的取り組みやすい活動であり、口頭でのコミュニケーション能力の育成にもつながる活動の基礎となる。ロールプレイをただ演じるだけでなく、プラス・ワン・ダイアログのように対話者同士が元の対話文に1文付け足すような活動を加えるとさらに実践に近いコミュニケーション活動になり、FRの枠を超えてFCへと発展していくと思われる。

3番目は、FCであったが、教科書全体に占める割合は1.6%であった。コミュニケーションを行う上で、瞬時に判断して、相手に考えを伝える必要があり、正確性もさることながら、流暢性や創造性が欠かせない。「流暢性を中心とした創造的な

活動」の割合が増えるような教科書が増えることが望まれるだろう。

ACを取り入れている教科書は1冊もなかった。「正確性を中心とした創造的な」活動は、「英語表現Ⅰ」の教科書では扱われていないことになる。*Mainstream of Give It a Shot* (p. 30)で、対話を聞いて、メモを取り、メモに基づいて英語で書かせる活動があるが、個人での活動であるため、ACに分類することができず、ARに分類せざるを得なかった。この活動をペアやグループで行えば、ディクトグロスに発展させることができるので、教科書作成者は参考にされると良いだろう。ディクトグロスは、学習者が「自分の書いたものと元の文章を比較することができ、自分の英語を比較することができ、自分の英語と正しい英語の間にギャップがあるかどうかを確認することができる」（白畑他、2009）だけでなく、協同して復元する作業を通じて、「主体的・対話的で深い学び」を実現することも可能である。文法化タスクやディクトグロスといった多様な活動を教科書に取り入れることで、学習者が既習の文法事項を用いて、創造的に表現できるようになる機会を提供することにもなるだろう。

6. おわりに

本研究は、平成28年度検定を経て、平成29年度から使用されている高等学校「英語表現Ⅰ」のすべての教科書で扱われている文法練習問題について、Baleghizadeh (2012) が提唱している文法教材開発のための枠組みを用いて調査分析を行ってきた。その結果、「英語表現Ⅰ」20冊の教科書の文法練習問題は、ARが最も多く、「正確性を中心とした再生的な」文法活動がほとんどを占めており、正解を求める文法理解トレーニング型の問題であることを裏付ける証拠となった。また、すべての教科書でAC、つまり、「正確性を中心とした創造的な」文法活動は行われていない実態も明らかにすることができた。

本研究は、すべての「英語表現Ⅰ」の教科書を対象として分析を行った点に一つの意義があると言えるだろう。先行研究では、採択率が高いものなどを対象として調査が行われており、すべての教科書を網羅することにより、「英語表現Ⅰ」に関して、全体的な傾向をとらえることができたからである。本研究では、「英語表現Ⅰ」の文法練習問題を対象としてきたが、「英語表現Ⅱ」についてもBaleghizadeh (2012) の枠組みを用いて同様に調査分析することで、「英語表現」科目に関する教科書の実態がより明らかになるものと思われる。今後の研究課題としたい。

平成30年に告示された高等学校学習指導要領では、「英語表現Ⅰ」、「英語表現Ⅱ」に代わり、「話すこと」、「書くこと」を中心とした発信力の強化を図るため、特にスピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、まとまりのある文章を書くことなどを扱う「論理・表現Ⅰ」、「論理・表現Ⅱ」、「論理・表現Ⅲ」という科目が新設された。「論理・表現Ⅰ」の「2 内容〔知識及び技能〕(1) 英語の特徴やきまりに関する事項」では、「語や文法事項については、三つの領域別の目標を達成するのにふさわしいものを適宜取り扱うものとする」と記されており、「英語表現Ⅰ」では触れられていなかった「文法事項」についての記載が見られる。

ここでいう三つの領域は、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」を指すが、発信力を中心とした目標の達成のために活用する文法事項を取り扱うことが読める。また、文部科学省（2019）は「第3款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」の「3 教材については、次の事項に留意するものとする」の中で、「各科目の内容の（1）に示す文法事項などを中心とした構成とならないよう十分に留意し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを設定した上で、言語活動を通して育成すべき資質・能力を明確に示すこと」（p. 265）と明記している。本研究で明らかにした「正確性を中心とした再生的な」文法活動が大半を占める教科書ではなく、「流暢性を中心とした創造的な」文法活動が多くなるような「論理・表現」の教科書が今後求められるだろう。

新たな大学入学共通テストの導入に先立って実施された試行調査では、発音、アクセント、語句整序問題が含まれていなかった。「英語表現 I」の多くの教科書で採用されている語句整序問題は、今後も教科書で採用されていくかどうか注視したい。

教科書は、主な教材として学習指導の方向性を決定するのに大きな役割を果たす（鶴澤，2016）。本研究が今後の教科書編集に少しでも資することを期待したい。

注

- 1) Baleghizadeh (2012) はディクトグロスを constructive な活動であり、creative とする。学習者はディクトグロスの最中、よく知っている単語を書き留め、新しく自分自身のテキストを作り出すときに、新しいやり方でよく知っている言葉を再結合するからと説明している。
- 2) 正式な教科書名は、引用文献の後の「分析対象とした高等学校『英語表現 I』教科書」に掲載した。

謝辞

本研究は、兵庫教育大学言語表現学会の平成29年度「研究活動のための研究費助成」を受けたものである。

引用文献

- Baleghizadeh, S. (2012). A grammar grid. *Modern English Teacher*, 21 (1), 62-65.
- Baleghizadeh, S., Goldouz, E., & Yousefpoori-Naeim, M. (2016). What grammar activities do ELT workbooks focus on?. In B. Tomlinson (Ed.), *SLA research and materials development for language learning* (pp. 153-165). New York and London: Routledge.
- Larsen-Freeman, D. (2003). *Teaching language: From grammar to grammaring*. Boston: Thompson Heinle.
- 孫工 季也・江利川 春雄. (2019). 高校英語教科書における社会問題を批判的に考える力の抜け方: 「英語表現 I」用教科書の設問題材分析を通じて. 和歌山大学教育学部紀要. 人文科学, 69, 51-56.

- 水島 梨紗. (2016). 高等学校英語教科書における語用論的解説についての論考:「英語表現 I」の事例をもとに(杉山吉弘教授 退職記念号). 札幌学院大学人文学会紀要 = *Journal of the Society of Humanities*, 99, 41-59.
- 文部科学省. (2010). 高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編. 東京: 開隆堂出版.
- 文部科学省. (2019). 高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編. 東京: 開隆堂出版.
- Murphy, R. (1994). *English grammar in use* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University.
- 中井 弘一. (2016). 高等学校「英語表現」の授業に求めたい活動. 大阪女学院大学 教職課程機関誌 OJC 教職活動報告・研究, 4, 156-165.
- Nunan, D. (1999). *Second language teaching & learning*. Boston: Heinle & Heinle Publishers.
- 下山田 芳子. (2018). 高等学校学習指導要領改訂のポイント 英語教育, 67(5), 16-17.
- 白畑 知彦・富田 祐一・村野井 仁・若林 茂則. (2009). 改訂版 英語教育用語辞典. 東京: 大修館書店.
- Thornbury, S. (2001). *Uncovering grammar*. Oxford: Macmillan Heinemann.
- 鶴澤 文子. (2016). 高等学校新学習指導要領における『英語表現 I』教科用図書: 伝える能力と文法指導 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 51, 81-89.
- Wajnryb, R. (1990). *Grammar dictation*. Oxford: Oxford University Press.
- 米山 朝二. (2011). 新編 英語教育指導法辞典. 東京: 研究社.

分析対象とした高等学校「英語表現 I」教科書

- ATLANTIS Higher Learning English Expression I Advanced*. 仙台: チアーズ.
- Attainable English Expression I*. 東京: 第一学習社.
- be English Expression I Advanced*. 東京: いいずな書店.
- be English Expression I Standard*. 東京: いいずな書店.
- Crown English Expression I New Edition*. 東京: 三省堂.
- Departure English Expression I Revised*. 東京: 大修館書店.
- DUALSCOPE English Expression I*. 東京: 数研出版.
- ECHO English Expression I*. 東京: 三友社出版.
- MAINSTREAM English Expression I Second Edition*. 大阪: 増進堂.
- MY WAY English Expression I New Edition*. 東京: 三省堂.
- NEW FAVORITE English Expression I*. 東京: 東京書籍.
- NEW ONE WORLD English Expression I Revised Edition*. 東京: 教育出版.
- Perspective English Expression I NEW EDITION*. 東京: 第一学習社.
- Revised BIG DIPPER*. 東京: 数研出版.

Revised POLESTAR English Expression I. 東京：数研出版。
Revised Vision Quest English Expression I Advanced. 大阪：啓林館。
Revised Vision Quest English Expression I Standard. 大阪：啓林館。
SELECT English Expression I New Edition. 東京：三省堂。
Vision Quest Expression I Core. 大阪：啓林館。
Vivid English Expression I NEW EDITION. 東京：第一学習社。

(かい じゅん・神奈川県立柏陽高等学校)

